



「無題」 ケント紙・針金 290mm×370mm 2012

## 堀尾昭子展 Akiko Horio

会期：2015年3月22日[日]－4月19日[日]

会場：GALERIE ASHIYA SCHULE

兵庫県芦屋市親王塚町3-11 〒659-0016

12:00-19:00 (最終日-17:00) 水・木休廊

対談：堀尾昭子×堀尾貞治

3月22日(日) 16:00-17:30

司会/原口研治(現場芸術集団「空気」事務局)

2015年3月22日[日]より、Galerie Ashiya Schuleにて、堀尾昭子展を開催致します。

堀尾昭子は、木や鉄棒、針金等の素材に、透明感あるアクリルやミラーを組み合わせ、それらを変形・構築・解体させた作品を制作しています。両手に乗るほどの嵩のない造形は、微妙な色彩と線によって構成され、それぞれの素材から意味を剥ぎ取った形に再構築されます。

モダンアート展に出品後、1968年に具体美術協会会員となった堀尾昭子は、当時から、静謐で緊張感ある作品を制作してきました。近年は、栃木県立美術館「前衛の女性 1950-1975」(2005)や国立新美術館「具体-ニッポンの前衛 18年の軌跡」(2012)への出展をはじめ、国内各地で活躍の場を広げています。

観る者に主題を提供するのではなく、余白の空間と呼応しあうように屹立するそれらの作品は、モノの根源への考察をより深めさせてくれることでしょう。展覧会の開催に合わせ、堀尾昭子と堀尾貞治による対談を開催致します。皆様のご高覧をお待ち申し上げます。

## ミニマル・アートからの隔たり

堀尾昭子が鏡を素材として用い始めたのは、今から約 45 年も前に遡る 1970 年代初頭である。当時制作していた箱状の作品の中に偶然鏡が落ちたことがきっかけで、初めは像が映り込むことに面白さを感じたが、やがてそれを意識せず制作するようになったという。このたびの個展出品作でも、アクリル製の鏡に水性アクリル絵具で彩色した 1 点が含まれている。本作では鏡の縁と中央部分が絵具で覆われ、塗り残された鏡面はごくわずかである。鏡本体よりやや小さい矩形の輪郭のみになった鏡面部分は、人が覗き込んでも自分の顔を顔として認識できないほど幅が細い。そのため映り込みの現象もしくは鏡像自体よりは、表面の光沢や硬くつややかな質感など鏡本来の特質が見る人の意識を引きつける。一方、絵具が施された部分は、均質な色面ではあるものの僅かに厚みがあり、タッチもかすかに残っていて、何度も丁寧に塗り重ねられたことが窺える。その艶消しの質感は鏡と好対照で、絵具がグレーの濃淡という無彩色であることも相俟って、色彩よりは質感の対比が際立っている。

本作に端的に表れているように、堀尾の作品は幾何学的形態と抑制されたタッチや色彩が特徴的であり、素材も濃厚なマチエールを主張するものはほとんど採用されていない。それゆえに堀尾の作品は、1960 年代にアメリカで顕在化したいわゆるミニマル・アートと呼ばれる美術になぞらえて、ときに「ミニマル」と形容されることもあった。確かに外観は似ている点もあるが、実は両者は大きく隔たっていると思われる。上記で触れたとおり堀尾の作品では、絵筆のタッチはほとんど目立たないながらも完全に消されているわけではない。堀尾自身、スプレーで絵具を塗布するような手法は好まないと言っており、絵筆で彩色する行為を決して手放してはいないのである。そして、質感の細かな差異に着目する姿勢は、素材への愛着をありありと伝えており、絵画特有の視覚性や彫刻における場の問題などを極限まで追究し、いかなるイリュージョンも分節化可能な構造も排して、例えばジャッドの言う「特種な／明確な物体 (Specific Objects)」にまで達したミニマル・アートとは、関心の在り処が全く異なっている。

本展出品作では鏡の作品以外に、白い画用紙にインクで線を引き黒い針金を加えた作品も、ミニマル・アートとの相違を明瞭に示しているだろう。ここでは、インクで描いた直線と曲がった針金との間に思いがけない連続性が提示され、二次元の直線が三次元に飛び出したかのように見える。そのちょっとしたイリュージョンを楽しむ遊び心は、同じく本展に出品された、黄とグレーのストライプの紙に、黄緑と赤のストライプの紙を載せた作品にも共通する。本作では、両者の絵柄がつながるように配置されているが、色価の違いで後者が前者の上を浮遊しているように見え、視覚的な遊びの要素が作品の核になっている。

この他、ささやかな大きさも堀尾作品の特徴の一つとして挙げられるが、この点でも、見る人を圧倒するほどの規模や重量を伴うことが多いミニマル・アートの作品群とは一線を画している。堀尾が用いるのは、アクリル製の鏡をはじめ、紙、材木、アクリル板等いずれも身近にあるものばかりで、しかも一人でたやすく持ち運ぶことが可能な嵩と重量である。これは、大振りな作品を制作するのが様々な制約により困難だからというよりも、逆に小さいことこそが堀尾の志向に合致するからではないか。堀尾が望ましいと考えるのは、細かな差異を持つ各部の対比や呼応などの関係性を、見る人が親近感を持って受容できる作品と思われ、そのためには物理的に小さい方が理に適っているだろう。それを手技で丹念に実現した堀尾作品は、自己批判を徹底した西洋美術のモダニズム志向の突端に位置するのではなく、むしろそれが捨象した面に光を当てているのである。

□作家略歴

1937 徳島市生まれ  
 1959 徳島大学医学部付属高等看護学校卒業  
 1968 具体美術協会会員  
 1970 芦屋美術協会会員

□個展

2014 ギャラリーヤマグチクンストバウ、大阪  
 2012 STREET GALLERY, 神戸  
 2010 LADS ギャラリー、大阪  
 2008 神戸わたくし美術館、神戸 花岡画廊、神戸  
 2007 信濃橋画廊、大阪  
 2006 信濃橋画廊、大阪  
 2005 信濃橋画廊、大阪 STREET GALLERY, 神戸  
 2003 ギャラリークオーレ、大阪  
 2002 ギャラリークオーレ、大阪 STREET GALLERY, 神戸  
 2001 AD&A GALLERY, 大阪 ギャラリークオーレ、大阪  
 2000 ギャラリークオーレ、大阪  
 1999 信濃橋画廊、大阪 ギャラリークオーレ、大阪  
 1998 ギャラリークオーレ、大阪  
 1997 ギャラリークオーレ、大阪  
 1996 ギャラリークオーレ、大阪  
 1995 ギャラリークオーレ、大阪  
 1994 信濃橋画廊、大阪  
 1993 信濃橋画廊、大阪  
 1992 アートスペース虹、京都  
 1991 オンギャラリー、大阪  
 1990 オンギャラリー、大阪

□グループ展

2014 「位置展」キルネッサンス・スクエア、姫路 「二人展」アトリエ 2001、神戸  
 2013 「LINE」三人展、ギャラリーヤマグチクンストバウ、大阪 「再生 100 文庫展」トンカ書店、神戸  
 2012 「土」四人展、海月文庫、大阪  
 2011 「3人の時間」卍字楼、京都 「踏み出し展」いちばぎやらりい有香、神戸  
 「松原登喜栄メモリアル」スペース草、豊中 スペース御蔵跡、大阪 パー・メタモルフオーゼ、西宮  
 「まねしん」スペース草、豊中 日仏交流現代美術展、MI ギャラリー、大阪  
 2010 「三人展」アートスペースかおる、神戸 「合成写真」展、アトリエ苺小屋、神戸  
 「あたりまえのこと・棒による」アートスペース虹、京都  
 2009 「緑」三人展、海月文庫アートスペース、大阪  
 2008 「私の村上三郎」パー・メタモルフオーゼ、西宮 「四角ならなんでも OK」ギャラリー島田、神戸  
 2007 「二人展」花岡画廊、神戸  
 2006 「ロッカー」アトリエ 2001、神戸  
 1975-2015 ぼんくら会参加  
 1967-2005 芦屋市展出品

2012 「具体」ーニッポンの前衛 18 年の軌跡 国立新美術館  
 2005 前衛の女性 1950-1975 栃木県立美術館  
 2004 具体回顧展 兵庫県立美術館  
 2003 フレモノ注意 芦屋市立美術博物館  
 2000 芦屋の美術 芦屋市立美術博物館  
 1999 静謐の美 芦屋市立美術博物館

□パブリックコレクション

宮城県美術館  
 芦屋市立美術博物館  
 兵庫県立美術館  
 神戸わたくし美術館